

厚生労働科学研究費補助金（長寿科学政策研究事業）
分担研究報告書

実態調査：介護老人保険施設担当

研究分担者 岸本桂子 昭和大学薬学部 社会健康薬学講座 社会薬学部門 教授

研究協力者 丸岡弘治 介護老人保健施設 横浜あおぼの里 薬局長

研究要旨

ポリファーマシー対策に必要な介護老人保健施設における薬剤師が関連職種との情報提供の体制を促進していくことが必要である。効果的な情報共有の仕組み及び関連職種に情報提供を行う際の様式を開発していくにあたり、介護老人保健施設における薬剤師と関連職種との情報提供の現状を把握することを目的に、老健薬剤師からのヒアリングおよび施設視察を行った。老健薬剤師が入所者の調剤およびセットに要する時間が、施設内での多職種連携および施設外での連携の濃淡に影響している。ポリファーマシー対策をしていく上で、かかりつけ医との情報共有するにあたり、「定期処方薬方針報告書・薬剤調整報告書」「薬剤変更に伴う診療情報提供書」が重要であり、これらの報告書を簡便に作成できる仕組み作りが重要である。病棟薬剤師のように薬剤管理に専念できる体制の構築やカルテ内に各職種が書き込む形式の「薬剤管理シート」の構築が処方提案の充実およびかかりつけ医との連携の促進に繋がると考えられる。

A. 研究目的

ポリファーマシー対策に必要な介護老人保健施設における薬剤師が関連職種との情報提供の体制を促進していくことが必要である。効果的な情報共有の仕組み及び関連職種に情報提供を行う際の様式を開発していくにあたり、介護老人保健施設における薬剤師と関連職種との情報提供の現状を把握することを目的に、老健薬剤師からのヒアリングおよび施設視察を行った。老健薬剤師からのヒアリングおよび施設視察は、今後、調査研究を行っていく上での現状把握を目的としたものであり、調査研究の前段階に位置する。

B. 研究方法

(1) 老健薬剤師からのヒアリング調査

5名の老健薬剤師から介護老人保健施設内及び施設外において、薬剤師と多職種連携についての現状のヒアリングを行うため、座談会を開催した。

(2) 介護老人保健施設での老健薬剤師業務及び多職種連携に関する視察調査

介護老人保健施設内及び施設外における薬剤師と多職種連携の体制や現状について把握するため、介護老人保健施設1施設の視察を行った。

C. 研究成果

(1) 老健薬剤師からのヒアリング調査

多くの施設で老健薬剤師が入所者の調剤およびセットを行っており、限られた時間の中で多職種と連携し、処方提案を行っていた。また、かかりつけ医への情報提供、退所時の薬剤説明などを実施できている施設もあった。病棟薬剤師のように老健施設で薬剤師が薬剤管理業務に専念している施設も存在した。薬剤師と多職種連携に関する主な調査結果は以下の通りである。詳細な調査結果は別添1に示した。

1) 施設内情報共有・多職種連携

- ・電子カルテ
- ・カルテ内に薬剤関連情報集約ツール構築
- ・回診同行
- ・持参薬は支援相談員から、体調等は看護師との連携により情報収集
- ・全ての入所者に入所前薬剤調査を実施

2) 施設外との情報共有

- ・支援相談員を介して施設内採用薬に変更の打診
- ・施設によっては、かかりつけ医に「定期処方薬方針報告書・薬剤調整報告書」「薬剤変更に伴う診療情報提供書」を送付
- ・同一法人内で病院と老健の連携の体制構築がされている施設もある
- ・地域医療ネットワークの活用
- ・地域での診療と介護連携を促進する研修会の開催
- ・お薬手帳を活用し退所時の薬剤説明

(2) 介護老人保健施設での老健薬剤師業務に関する調査

薬剤師と多職種連携に関する主な調査結果は以下の通りである。詳細な調査結果は別添2に示す。

- ①薬剤師はサービスステーション内に常駐のため看護師をはじめとして近い距離で入所者情報を共有し、タイムリーに適切なタイミングで介入できていたと思われた。
- ②薬剤師が多岐にわたる委員活動を通じて様々な職種の方とやりとりがあり、常にスムーズなコミュニケーションがしやすい環境と思われた。
- ③薬剤師が薬学生実習の実施を主導し、各職種へのところへも学生を送り学生の気づき、多職種連携への意識を高めていたと思われた。この施設全体で協力して薬学生を育てる取組が大変素晴らしく、普段の良い連携にも繋がる取組だと思われた。

D. 考察

老健薬剤師が入所者の調剤およびセットに要する時間が、施設内での多職種連携および施設外での連携の濃淡に影響している。病棟薬剤師のように薬剤管理に専念できる体制の場合、処方提案や副作用モニタリングの充実、施設外との連携、退所時の薬剤説明・情報提供などに繋がり、薬によるリスクを減らせると考えられた。また、ポリファーマシー対策をしていく上で、かかりつけ医との情報共有するにあたり、「定期処方薬方針報告書・薬剤調整報告書」「薬剤変更に伴う診療情報提供書」が重要であり、これらの報告書を簡便に作成できる仕組み作りが重要である。薬物治療に関連する情報が散らばって存在しているため、カルテ内に各職種が書き込む形式の「薬剤管理シート」の構築が、処方提案の充実およびかかりつけ医との連携の促進に繋がると考えられる。

E. 結論

病棟薬剤師のように薬剤管理に専念できる体制の構築やカルテ内に各職種が書き込む形式の「薬剤管理シート」の構築が処方提案の充実およびかかりつけ医との連携の促進に繋がると考えられる。

F. 研究発表

1. 論文発表：なし
2. 学会発表：なし

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得：なし
2. 実用新案登録：なし
3. その他：なし

厚生労働科学研究費補助金（長寿科学政策研究事業）
 分担研究報告書
 老健薬剤師の多職種連携のあり方に関する座談会 議事録
 研究分担者 岸本桂子 昭和大学薬学部, 社会健康薬学講座 社会薬学部門 教授

老健班の研究の一環で、介護老人保健施設内及び施設外において薬剤師の多職種連携についての現状を把握するため、座談会を開催し、5名の老健薬剤師からヒアリングを行った。

日時: 令和5年 3月 18日 (土) 14:00 ~ 17:00

場所: 昭和大学旗の台キャンパス 2号館 1階 109 社会薬学研究室

(〒142-0064 東京都品川区旗の台1丁目5-8 電話: 03-3784-8000)

参加者:

溝神文博 (国立長寿医療研究センター 薬剤部)

岸本桂子 (昭和大学薬学部 社会健康薬学講座 社会薬学部門)

丸岡弘治 (介護老人保健施設 横浜あおぼの里 薬剤部)

新井克明 (大洗海岸病院 薬剤部)

東原和美 (日本パプテスト連盟医療団 パプテスト老人保健施設 医務部)

早乙女彩子 (医療法人社団ときわ会 介護老人保健施設小名浜ときわ苑 薬剤部)

有光佳代子 (医療法人社団哺育会 介護老人保健施設 ナーシングプラザ港北)

議事:

(敬称略)

◇ 14:00 ~ 14:10 出席者 自己紹介

◇ 14:10 ~ 14:25 研究班概要説明 国立長寿医療研究センター 薬剤部 溝神 文博

◇ 14:25 ~ 16:55 各老健施設での多職種連携の方法について (発表 15分及び質疑応答 15分程度)

丸岡弘治 (介護老人保健施設 横浜あおぼの里 薬剤部)

新井克明 (大洗海岸病院 薬剤部)

東原和美 (日本パプテスト連盟医療団 パプテスト老人保健施設 医務部)

早乙女彩子 (公益財団法人ときわ会 常磐病院)

有光佳代子 (老健 ナーシングプラザ港北)

◇ 16:55 ~ 17:00 まとめ 国立長寿医療研究センター 薬剤部 溝神 文博

【各老健施設における多職種連携について】

施設A (入所者 150名、薬剤師 1名)

- 薬剤師の業務: 薬剤師が処方提案を医師に行い、調剤、セットを行っている。これらの業務で手が一杯であり、退所時の情報提供は実施できていない。
- 施設外との情報共有: 支援相談員を介して施設内採用薬に変更の打診、疾患名の漏れが多く、支援相談員を介して確認している。
- 施設内での情報共有: 看護師がリハや栄養から情報収集し、看護師に情報が集約されている。看護師の情報を基に、薬物治療について見直しが必要な患者をスクリーニングし、医師に処方提案を行っている。

施設B (入所者 100名、薬剤師 1名)

- 薬剤師の業務: 持参薬確認、薬学的管理 (相互作用、副作用等)、服薬指導・薬剤説明・お薬手帳記載、回診、ケアカンファレンス、朝礼・申し送り・入退所判定、薬剤のダブルチェック、常備使用分オーダー入力、中止指示のオーダー修正、薬剤サマリ (お薬手帳) の作成、医薬品情報収集・提供、各種委員会
 - 調剤は病院にて行っており、老健薬剤師は病棟薬剤師のように薬剤管理のみを実施している
 - 副作用モニタリング: 電子カルテの情報に基づき行っており、血圧低下、肝機能低下が多くみられる。また、皮膚トラブル (褥瘡) について軟膏処置同行を行っている。

- 施設内での情報共有：電子カルテ。理学療法士からリハ中の血圧、疼痛について情報収集している。また、相談員と退所後の服薬管理を相談。
- 施設外との情報共有
 - 退所時の薬剤説明：お薬手帳を活用
 - 薬剤調整報告書：「処方内容の変更の可能性」「処方内容」を記載し、入所 1 ヶ月以内にかかりつけ医に送付。
 - 薬剤変更等に係る情報提供書：退所 1 ヶ月以内に、かかりつけ医に薬剤調整結果を報告している。「傷病名」、「処方薬剤名」、「変更・減薬・減量の別」、「変更・減薬・減量の理由」、「変更後の経過」、「追加処方の経緯」を記載（処方変更等についてはカルテから転載できるが、「変更後に経過」を記入するのに時間を要する）。

施設 C（入所者 150 名、薬剤師 1 名）

- 施設内での情報共有：診療情報提供書、診療情報提供添付書、実態調査票（利用要否判定会議資料）、入所前薬剤調査書、薬剤鑑別報告書、週刊入退所予定表、マネジメントレビュー（定期）、かかりつけ医連携薬剤調整加算、介護老人保健施設管理システム（介護ソフト）を活用し各部署の記録確認、判定会議（毎週 1 回）～相談員、NS、リハ、栄養、薬剤師～、スタッフ会議、担当者会議、カンファレンス、朝ミーティング（各部署からの報告）
 - 全ての入所者に入所前薬剤調査を実施：相談員が現在の内服薬を記載、薬剤師が代替薬や処方提案を記載、医師が継続・中止・頓用指示を記載する。
- 施設外との情報共有：実態調査票、診療情報提供書、診療情報提供添付書、入所前薬剤調査書、薬剤鑑別報告書で情報共有している。その他、調剤薬局の担当薬剤師に問い合わせ、ケアマネージャーと支援相談員で情報共有、地域連携室のスタッフと支援相談員で情報共有などを行っている、また、同法人グループの病院からの入所については、入所予定で薬剤調整を要する患者の処方提案の流れができています。
 - 地域療ネットワークの活用：医療機関、薬局だけではなく、介護施設も含まれる。但し、利用には患者の同意が必要。
 - 地区にて医療と介護連携を促進する研修会の開催

施設 D（入所者 100 床）

- 施設内での情報共有：
 - 入院処方箋に検査値(BUN、Cre、ALT、AST)と体重
 - 5 回分の検査値が自動で入るように：クレアチン、K、Na、血色素、血小板、赤血球、白血球→紙をクリアファイルに重ねていく、医師は処方時に薬剤師は調剤時にすぐに確認できる。
 - 服薬カートではなく、おくすりカレンダーを使用→ミスの削減、災害時に医療者以外でも扱いやすい。
 - 回診同行：曜日を固定、100 名、1 回 25 名、患者 1 名当たり 1 月に 1 回。薬剤師が常勤ではなかったため導入された。関わる職種の情報ファイルを広げて、情報を確認ができる
 - また、外部の医師が入ることで回診同行の曜日が固定され、導入がスムーズであった。
 - 検査値：各患者に必要な項目をピックアップ、ピックアップはそれぞれの薬剤師の基準でおこなっている。老健では春と秋の 2 回健康診断（法律上は 1 年に 1 回、任意）、医療院は 3 ヶ月に 1 回実施。

施設 E（入所者 172 名、薬剤師 1 名）

- 施設内での情報共有：「体調の変化の際は薬剤の影響」「薬剤副作用を疑う」「3 ヶ月毎の会義で現在の状態に適切性確認」「常に薬剤の副作用を疑う」「処方経緯を踏まえて現病態に必要なかの確認」の観点で老健薬剤師が各職種から情報収集を行い、医師に報告し

ている。

- 薬剤関連情報集約ツール「薬剤管理シート」(カルテ内で共有)：薬物治療に関連する情報が散らばって存在しているため、老健薬剤師が「薬剤管理シート」に集約している。薬剤師がいない老健も多いため、各職種が書き込む形式が本来望ましい。既往歴はLIFEに入力されるようになった。
- 施設外との情報共有
 - 定期処方薬方針報告書：入所時にかかりつけ医に、事前に確認した情報に合わせて当施設入所後での処方薬の方針を報告している。薬剤師・医師で作成し連名で出している。
 - 薬剤変更に伴う診療情報提供書：退所時にかかりつけ医への薬剤変更の経緯と経過を薬剤師・医師で作成し連名で出している。

【老健に入所している患者像における薬物療法】

介護老人保健施設において、かかりつけ医との連携を推進し、継続的な薬物治療を提供する観点からの見直しに対し「かかりつけ医連携薬剤調整加算」が設定されている。ポリファーマシー対応を行っていく契機となる症状として以下があげられた。高齢者医療においてガイドラインに従った薬物治療を行っているとは薬剤はどんどん追加となってしまう。高齢者にどこまでの治療が必要かを考える必要があるが、判断は難しい。

- 薬剤起因性老年症候群
- 低血圧
- 傾眠
- 過鎮静
- 食欲不振（ドネペジル、降圧剤、睡眠薬など）
- 骨折（降圧薬、睡眠薬など）

介護老人保健施設において行われる薬物療法に関連する特徴として、介護老人施設において抗がん剤及び医療用麻薬以外の薬剤や検査費等は包括項目となっていること、薬剤師の配置が十分でないことがあげられた。全国に老健は4337施設存在しているが、常勤薬剤師が453名、非常勤薬剤師が780名である。薬剤師の配置は300床1名となっており、入所者100名の施設の場合、0.33名である。また、薬剤師の配置は努力義務であり、罰則がない。薬剤師の配置が十分でないことから薬剤の管理面等における問題もみられた。

解決策として、薬剤管理に報酬が導入され、薬剤師の配置が増えることで、薬によるリスクを減らせると考えられる。なお、調剤の外注の制度が今後整ってくると考えられるが、老健においては薬剤変更が多いので外注は難しいとの意見があげられた。

- 老健で管理が難しい薬剤：サムスカ（血清Naの測定、肝機能検査）、抗がん剤など
- 抗凝固療法：費用面からDOACをワーファリンに変更する場合もある。ただし、ワーファリンが無効でDOACに変更している場合もあるので、注意が必要である。
- 老健には嚥下障害の患者が多いので、服薬支援が必要である。
- アダラートCRなどの徐放薬が粉碎されていた。
- 情報が上手く共有されていなければどのようなことが起こるか：リセドロン酸Naは2020年から相談員の回答であったが、お薬手帳を確認すると2007年から継続して服用していた（ビスホスホネート製剤の長期服用により大腿骨の非定型骨折リスクが上昇する）。
- おくすり手帳：電子お薬手帳は各社様式が異なり、閲覧、書き込みができない。
- 緊急入院することも多い、その場合、病院への情報提供書の作成・提出は難しい。

厚生労働科学研究費補助金（長寿科学政策研究事業）分担研究報告書

介護老人保健施設での老健薬剤師業務及び他職種連携に関する視察調査

研究分担者 岸本桂子 昭和大学薬学部, 社会健康薬学講座 社会薬学部門 教授

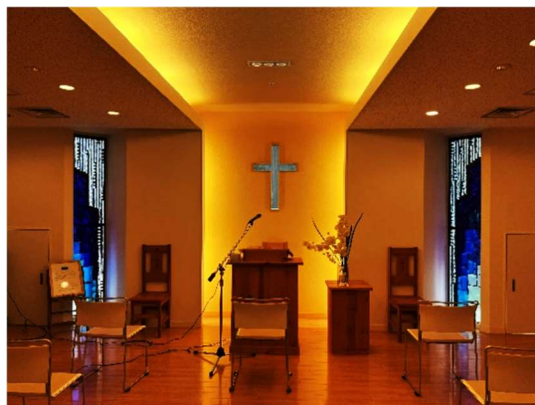
研究協力者 丸岡弘治 介護老人保健施設 横浜あおぼの里 薬局長

老健班の研究の一環で、介護老人保健施設内及び施設外において、薬剤師と多職種連携についての視察を行い、実態調査を実施した。

1. 目的：介護老人保健施設での老健薬剤師業務に関する調査
2. 日時：2023年3月23日（木）11時～15時
3. 視察者：溝神文博（国立長寿医療センター薬剤部・高齢者薬学教育研修室長）
岸本桂子（昭和大学薬学部社会薬学健康講座 教授）
丸岡弘治（介護老人保健施設 横浜あおぼの里 薬局長）
4. 視察先：日本バプテスト連盟医療団 バプテスト老人保健施設（京都府京都市左京区）
5. 視察内容：

【施設概要】

京都府京都市左京区地域において介護老人保健施設として1999年に開設され、100床を有する病院併設型の施設である。2023年3月現在、在宅復帰を重点的に超強化型施設として地域に根差した活動をされている施設である。特に全国的には数少ない「調剤業務のない専従老健薬剤師」を置かれている施設である。日本バプテスト連盟医療団は、1954年に米国南部バプテスト連盟に連なる諸教会の献金によって創立された連盟との経緯があり、今でも施設内に礼拝堂を有する日本では珍しい施設である。



【専従老健薬剤師の主な業務】

3階療養棟視察では、フロア及びサービスステーション内の薬剤配置状況について説明を受けた。看護師の配薬カート準備に、薬剤師が毎回セット済みの薬剤チェックを行っていた。それゆえ、誤薬発生事故発生が低く抑えられているとのことであった。薬剤調剤は建物自体廊下でつながっている併設病院調剤室にて作成されていた。そのため、薬剤師は調剤業務には縛られずに他の薬剤評価等に取り組めるようになっていた。老健施設内には調剤室はないもの、薬剤師は主にサービスステーションに常駐し、医師・看護師・リハ職とだけでなく、入所者とも非常に近い距離で業務を行っていた。



2階療養棟視察では、常備薬や救急カートの薬剤について説明を受け、介護施設ながら病院のように様々な薬剤が用意されていた。薬剤師は更に薬学生の実習生の受け入れにも力を入れており、学生からは非常に高い評価を得ていた。薬剤師業務は薬剤関連業務にとどまらず、広報委員会活動、ICT委員会等様々な活動に参加されていた。

【薬剤師と多職種連携】

- ④ 薬剤師はサービスステーション内に常駐のため看護師をはじめとして近い距離で入所者情報を共有し、タイムリーに適切なタイミングで介入できていたと思われた。
- ⑤ 薬剤師が多岐にわたる委員活動を通じて様々な職種の方とやりとりがあり、常にスムーズなコミュニケーションがしやすい環境と思われた。
- ⑥ 薬剤師が薬学生実習の実施を主導し、各職種へのところへも学生を送り学生の気づき、多職種連携への意識を高めていたと思われた。この施設全体で協力して薬学生を育てる取組が大変素晴らしく、普段の良い連携にも繋がる取組だと思われた。